

中学生の運動部活動における友人関係の質と 部活動への適応感との関連の検討

西田 順一

Friendship quality and adjustment to athletic extracurricular activity
in junior high school children

NISHIDA Junichi

Abstract

The effects of the quality of friendship on the adjustment to club activities were investigated. In Study 1, a scale for measuring the quality of friendship in athletic club activities of junior high school students was developed, based on the Sport Friendship Quality Scale (SFQS: Weiss & Smith in 1999). Then, a questionnaire survey was conducted with junior high school students ($n=604$) belonging to athletic clubs. Exploratory factor analysis was conducted on the survey data and the "Athletic extracurricular activities Friendship Quality Scale for Japanese junior high school student (AFQS-J)" was developed, which consisted of the following three factors and 14 items: "Self esteem enhancement and supportiveness," "Intimacy," and "Conflict." In Study 2, the relationship between the quality of friendship and feeling of adjustment to club activities was investigated. Participants ($n=652$) responded to the scale. Results of multiple regression analysis indicated that the quality of friendship was related to the adjustment to club activities. Moreover, there were gender differences in this result: "Intimacy" had a negative effect on positive attitude to club activities in girls, whereas it had not a significant effect in boys. Methods of using the scale and future problems were discussed.

Keywords: friend, personal relationship, psychological adjustment, self-esteem enhancement and supportiveness, youth sports

キーワード：友達, 人間関係, 心理的適応感, 自尊感情の向上支援, 青少年スポーツ

問題と目的

運動部活動実践による肯定的、否定的な影響性

わが国の青少年期の運動・スポーツ実施を支える基盤として、学校教育における運動部活動がある。近年、減少傾向にあるが令和4年度では約187万人の中学生が運動部活動に所属し（日本中学校体育連盟，2022）、活動に従事している。運動部活動はスポーツに興味と関心を持つ同好の生徒がスポーツを通して交流し、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を体験する活動であるとともに体力の向上や健康の増進にも極めて効果的な活動とされている。さらに、運動部活動ではスポーツに親しませ、互いに協力し合って友情を深めるといった好ましい人間関係の形成に資する機会であるとの意義も示されている（文部科学省，2018）。

実際、運動部活動の取り組みにより多様な効果が得られることが近年の実証的研究のレビュー（今宿ほか，2019）によっても示されている。今宿ほか（2019）では、運動部活動による身体の発育発達への効果を探った研究が総数として最も多く示されているものの、近年では心理社会的発達や学校適応の効果研究が増えている。心理社会的発達については、目標設定や体調管理等の個人的スキルや、他者とのコミュニケーションや時間管理等の対人スキルといったライフスキルの獲得可能性が示されている（今宿ほか，2019）。また、運動部活動にて積極的に活動を行った場合は友人関係、教師との関係、学業への意欲等の学校生活の諸領域にて心理的適応が良好となることも示されている（岡田，2009）。

以上のように、運動部活動の実施は日常生活におけるライフスキルの汎化効果や学校での望ましい心理的適応に関連する貴重な役割を果たす。これらを踏まえると、子どもたちの多くが何らかの運動部活動に携わり、積極的かつ継続的に取り組むことが推奨される。とはいえ、他の学校場面と同様、運動部活動でも活動の制限、部員との関係等の多様なストレスが存在し（手塚ほか，2001）、適切な対処がなされない場合、不機嫌・怒り、抑うつ・不安、身体的反応といったストレス反応が運動部活動により生じ（手塚ほか，2003）、結果的に活動に支障をきたすこともある。たとえば、高田ほか（1987）は運動部活動中に身体・心理・行動的に負の症状を呈した中学1年生から3年生の男女8名の事例を報告した。ここでは臨床的手法および心理検査にて心理状態を診断し、運動部活動内での人間関係のきびしさや暴力行為、悪口や除け者等、様々なネガティブな体験が頭痛、疲労感、腹痛、登校拒否等の負の症状に関与していることを示唆した。また、渋谷ほか（2011）は半構造化面接より収集された質的データに対し修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより運動部活動の体験から中途退部に至るまでのプロセスを検討している。戸惑いや否定的印象の形成が試練の幕開けや苦悩の日々等を引き起こし、心の悲鳴や変貌する自分に影響を及ぼす可能性を示している。具体的には、人間関係や練習、指導方針等の不満を感じる出来事との出会いが否定的な情動を引き起こし、また思考や行動が否定的となるという過程を明らかにした。このような場合、先述の重要な教育的機会を逸すると同時に種々の効果の獲得は望めない。また部活動時に留まらず、学校生活および日常生活全般にわたり不適応となる可能性さえも否めない。従って、教師やコーチといった指導者は運動部活動内の生徒の心理的適応を重んじつつ、積極的かつ継続的に部活動に従事でき、結果的に種々の恩恵が獲得される運動部活動環境を整える配慮が必要不可欠となる。

運動部活動における友人関係に着眼する意義

運動部活動への積極的な参加や継続に影響する要因の1つに‘友人関係’が挙げられる。一般に友人関係は親子関係や夫婦関係等の種々の対人関係と比べると自由意志で選ぶことができる相手との関係であり、離脱や相手を交代させやすい任意性の高い関係とされる。また、青年期の友人関係は緊張を解消し不安を和らげる安定化の機能、他者との相互作用を学ぶ社会的スキルの学習機能、

運動部活動における友人関係に着眼する意義

運動部活動への積極的な参加や継続に影響する要因の1つに‘友人関係’が挙げられる。一般に友人関係は親子関係や夫婦関係等の種々の対人関係と比べると自由意志で選ぶことができる相手との関係であり、離脱や相手を交代させやすい任意性の高い関係とされる。また、青年期の友人関係は緊張を解消し不安を和らげる安定化の機能、他者との相互作用を学ぶ社会的スキルの学習機能、

そして、発達のモデルとみなすモデル機能という3機能を有し、青年の社会化の促進に重要な役割を有する(松井, 1990)。

スポーツ参加行動および離脱行動について、Gould and Petlichkoff(1988)は「子どものスポーツへの参加と離脱に関する動機づけモデル」を提示している。本モデルのスポーツ参加行動には‘新しいスキルの習得’、‘面白さ’、そして‘競争的挑戦および勝利’等が要因とされ、またスポーツ離脱行動には‘新しいスキルの習得の失敗’、‘面白さの欠如’、そして‘競争性の無さおよび敗北’等が付置される。さらに参加と離脱のいずれにも共通して‘友好関係’が要因として位置づけられている。すなわち、友人関係の豊かさはスポーツへの参加要因と捉えられ、また友人関係の希薄さはスポーツの離脱要因と捉えられる。加えて、Smith(2007)は青少年期の子どもにて、友人はスポーツ参加動機の主要な要因であり、また友人との比較や評価は有能感に影響する情報に成りえることを示している。さらに、スポーツは他者と一緒に時間を過ごす機会や協力する機会を提供し、またポジティブな友人関係を育成する機会にもなっている。すなわち友人や仲間との関係はスポーツに影響を及ぼし、またスポーツは友人関係に影響を及ぼすという両者の循環関係が示され、この循環関係はとくに青少年期にて密接であることが示されている。

上述のとおり、友人の存在は運動部活動の入部を左右する重要な要因の1つに捉えられ、運動部活動内にて友人関係を良好に維持できれば、部活動継続の要因ともなる。一方で、運動部活動内での友人関係が不良となれば退部の要因ともなり得る(岡田, 2009)。従って、運動部活動での友人関係の質(Friendship Quality)やその程度が心理的適応や心理的不適応等に結びつくと考えられ、適応に影響を与える重要な視点として友人関係の質に焦点をあてる必要がある。心理・社会的効果に関与する友人の側面としては、‘友人の有無’、‘友人の種類’、‘友人関係の質’の3つが挙げられる(Hartup, 1995)。スポーツ場面では友人と一緒にさまざまな関わりの機会が豊富にある

ことから友人関係の質はとくに影響性が大きい側面であると考えられている(Weiss and Smith, 2002)。友人関係の質の高さは向社会的行動、親密さ等の肯定的特徴により、一方、友人関係の質の低さ是对立や競争等の否定的特徴により示される人間関係の肯定的および否定的側面の知覚と定義されている(Berndt, 2002)。これらを参考とし本研究にて扱う運動部活動における友人関係の質は、「運動部活動において生じる友人との肯定的および否定的関係性に関する生徒自身の主観的知覚の見積り」と定義した。以上を踏まえ本研究では、生徒の運動部活動における友人関係の質の影響性について検討を行うこととした。

青少年スポーツ場面における友人関係の質を扱った先行研究

青少年の運動・スポーツにおける友人関係とその心理的影響に着目した研究は不足しているが、Weiss et al.(1996)はスポーツにおける子どもの友人関係の特徴について検討している。ここでは、1年間から10年間に及ぶスポーツクラブへの参加経験を有する8歳から16歳までの男女に深層面接を実施し、帰納法による内容分析を実施した結果、友人関係の質として12のポジティブな側面と4のネガティブな側面が存在することを確認した。また、各側面の性や年齢による特徴の違いも明らかにした(たとえば、女子に「情動的サポート」が多いことが認められている)。Weiss et al.(1996)の成果を踏まえ、Weiss and Smith(1999)は青少年のスポーツ場面での友人関係の質を測定する尺度の作成を試みている。ここでは、Parker and Asher(1993)によるFriendship Quality Questionnaire(以下「FQQ」と略す)をスポーツ場面に全面的に応用することが困難であることを確認したうえで、Weiss et al.(1996)の質的調査も加え項目を作成し、探索的因子分析を繰り返し、さらに検証的因子分析および妥当性、信頼性の分析を行った結果、最終的に6因子、計22項目から成るSport Friendship Quality Scale(以下「SFQS」と略す)を作成した。SFQSの作成により、友人の質の特徴理解とその種々の心理

的側面への影響に関する研究が着手され始めた。たとえば、Weiss and Smith(2002)は、青少年期のテニス選手を対象にSFQSを実施し、学年および性にて友人関係の質に差異があることを明らかにした。また、友人関係の質の複数の側面がエンジョイメントおよびコミットメントにより強く関連することを明らかにした。さらに、Smith et al.(2006)はスポーツキャンプに参加した10歳から14歳までの子どもたちの友人関係の質と諸変数との関係を検討し、ポジティブな友人関係の質と自己決定による動機づけ、エンジョイメント、主観的有能感との有意な正の相関関係があること、さらにネガティブな友人関係の質と不安との間に有意な正の相関関係があることを明らかにしている。加えて、友人関係の質と仲間受容とをクラスターに分類し、プロフィール化して諸変数との関係を検討し、ポジティブな友人関係の質を高く評価したプロフィールにてエンジョイメントや主観的有能感を高く見積もり、不安を低く見積もること等が明らかにされた。

上述のようにSFQSを指標とし、スポーツ場面への参加や動機づけ、そして、不安等の心理的変数との関連性が検討され、得られた知見は青少年のスポーツ場面での友人関係に焦点化した指導や教育指針を考える上で活用できる資料と思われる。これら一連の研究は欧米にて進められてきたことから、日本人の特徴を考慮した研究が求められている。先述した運動部活動における友人関係の観点から適応を考慮する場合、SFQSの援用により運動部活動時における友人関係の質を効果的に捉えることが可能になり、運動部活動場面の有効な知見が得られると考えられる。

目的

以上より、本研究ではSFQSを援用し、中学生の運動部活動における友人関係の質尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。また、運動部活動における友人関係の質と運動部活動へ適応感との関連について検討することも目的とした。

研究1：中学生の運動部活動における友人関係の質尺度の作成

目的

研究1では、SFQS(Weiss and Smith, 1999)を援用し、中学生の運動部活動場面における友人関係の質を測定可能な尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とした。また、追加的な分析として中学生の運動部活動場面における友人関係の質の性差と学年差も合わせて検討することとした。

方法

対象者 A県の公立中学校3校の運動部に所属する1年生から3年生までの604名(男子340名、女子264名;年齢 $M=13.6$, $SD=0.97$)であった。対象者は卓球($n=103$)、バスケットボール($n=83$)、サッカー($n=67$)、陸上($n=61$)、バドミントン($n=59$)、野球($n=56$)、テニス($n=49$)、バレーボール($n=47$)、ソフトテニス($n=31$)、柔道($n=18$)、剣道($n=13$)、水泳($n=10$)、ソフトボール($n=7$)の各運動部の所属であった。

また、作成する尺度の構成概念妥当性を検討するため、上記の対象者の一部である公立中学校1校の運動部に所属する中学2年生95名(男子46名、女子49名;年齢 $M=13.6$, $SD=0.48$)を代表サンプルと捉え、以下の予備尺度項目に再度回答の依頼を行った。対象者は卓球($n=17$)、バスケットボール($n=12$)、サッカー($n=5$)、陸上($n=8$)、バドミントン($n=23$)、野球($n=8$)、バレーボール($n=5$)、ソフトテニス($n=16$)、柔道($n=1$)の各運動部の所属であった。

予備尺度の作成 青少年の運動・スポーツ場面での友人関係の質を測定するSFQSについて、まず、日本語の質問紙を作成するにあたり原著者のWeiss氏に翻訳の許諾を得た。つぎに、著者と米国にて長年の研究経験を有し、本領域に造詣の深い研究協力者がそれぞれ翻訳を行い、項目内容の相違点を詳細に協議し、その合

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感

議に基づいて22項目を作成した。続いて、国語教育を専門とする教育学部教員により中学生が理解できる意味内容となるよう語句の修正が加えられた。さらに、中学1年生3名に対し、項目の意味内容を理解できるかを尋ね、できるだけ具体性を持った分かりやすい項目となるよう修正した。最後に、英語と日本語の双方に堪能な研究協力者により逆翻訳を行い、意味内容が日本語に正確に反映されているか確認した。

調査に用いた質問紙では、「以下の文章は、運動部活動における友人関係について書かれたものです。以下の文章にあなたはどの程度あてはまりますか」という教示文を用い、そのあてはまりの程度を5件法（1：ぜんぜんあてはまらない — 5：とてもあてはまる）にて評価させた。また、記入においては Weiss and Smith (1999) に従い、運動部活動内で最も仲の良い友人を1人想像し回答すること、またその友人を回答の途中で代えないことを教示した。最も仲の良い友人との関係性の回答を求めた理由は、第2、第3番目に仲の良い友人と比べて最も仲の良い友人において友人関係の質がより高い傾向を示すこと、加えて友人関係の質の高さは良好な学校適応感、満足感、そして孤独感と関連すること (Weiss and Smith, 1999) を考慮したためである。

さらに、本研究にて作成する尺度の基準関連妥当性を検討するため、以下の2つの指標もあわせて回答させた。

友人との活動の質問紙 榎本 (1999) が作成した友人関係の活動的側面を測定する尺度のうち、「相互理解活動」因子 (8項目) を用いた。本尺度により所属する運動部活動での同性の親しい友だちとの付き合い方をどの程度行うかについて、6件法 (1：まったくしない — 6：とてもよくする) で回答を求めた。得点が高くなるほど、友人との活動を積極的に行うことを意味するよう得点化した。中学生を対象とした調査から信頼性と妥当性は既に確認されている (榎本, 1999)。「相互理解活動」は互いの相違点を認め合い、価値観や将来の生き方等を語り合う

程度を尋ねていることから友人関係の質におけるポジティブな側面とは正の相関を示し、ネガティブな側面とは負の相関を示すと予測される。

中学生用疎外感尺度 宮下・小林 (1981) が作成した中学生用疎外感尺度のうち、「孤独感」因子 (12項目) を用いた。本尺度により所属する運動部活動で、自分自身をどのように感じているかについて、7件法 (1：まったくそう思わない — 7：非常にそう思う) で回答を求めた。得点が高くなるほど、孤独感を高く感じていることを意味するよう得点化した。本尺度は友人関係の質のポジティブな側面とは負相関を示し、ネガティブな側面とは正相関を示すと予測される。

手続き 調査内容について研究者が中学校長および担当教員に研究計画書に基づき研究概要の説明を行い、研究協力の承諾が得られた学校にて調査を実施した。調査は各校のクラス担任が調査票の配布を行い、学活や放課後等の時間帯を利用して学級単位で回答を求めた。調査票への回答は強制ではないこと、学校の成績には一切関係しないことを担任から説明してもらった。また回答はすべて数値化されて処理されるため、個人が特定されることがないことも説明された。さらに、調査票への回答およびクラス担任への調査票の提出により調査への協力について同意したこととみなすことが説明された。調査時期は、2009年10月下旬から11月上旬であった。

結果と考察

中学生の運動部活動における友人関係の質尺度の因子分析 本研究では、IBM SPSS Statistics 25およびAMOS 25を用いて統計解析を実施した。統計解析にて有意水準は5%とした。最初に、項目分析を実施し、回答肢の両極に全体の70%以上を占めた項目および標準偏差が小さかった1項目を分析から除外した。つぎに、21項目に対して、探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。その結果、固

有値 1.0 以上 4 因子を抽出した。そのうち、いずれの因子の負荷量においても .40 以下であった項目、2 つ以上の因子に .35 以上の負荷量を有する項目を削除の基準とし、繰り返し同様の因子分析を行った。その結果、表 1 に示した 3 因子解 (14 項目) が抽出された。第 1 因子 (6 項目) には、SFQS 因子 'Self-esteem enhancement and Supportiveness' のすべての項目および 'Loyalty' の 2 項目により構成された。これらのうち、'Loyalty' の 2 項目 (「友だちは、私のことを色々気にかけてくれる」、「友だちとはお互いに支えあっている」) は、共に自尊感情の向上を支える行動を意味する内容であると捉えられるため、「自尊感情の向上支援」と命名した。そして、第 2 因子 (5 項目) には、SFQS 因子 'Companionship and pleasant play' の 3 項目および 'Loyalty' の 2 項目から構成され、これらは友人との同一行動や密接な言語的コミュニケーション行動を含んでいることからそれらに共通する意味内容として、「親密性」と命名した。最後に、第 3 因子 (3 項目) には、SFQS 因子 'Conflict' のすべての項目から構成され、これらは友人との口論や衝突に関する対立的なコミュニケーション行動と捉えられるため、「対立」と命名した。以上の手順により抽出、命名された 3 因子 14 項目を「中学生の運動部活動における友人関係の質尺度 (Athletic extracurricular activities Friendship Quality Scale for Japanese junior high school student : 以下「AFQS-J」と略す)」とした。AFQS-J の特徴を明らかにするため、基本統計量および因子間の相関を表 2 に示した。「自尊感情の向上支援」と「親密性」との間に $r=.54$ の値が得られ、中程度の関連が両因子間にも確認された。

信頼性の検討 作成された AFQS-J の内的整合性を調べるため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、「自尊感情の向上支援」は $\alpha=.83$ 、「親密性」は $\alpha=.75$ 、そして「対立」は $\alpha=.74$ という値が得られた。これら 3 因子は、Bryant et al.(2007) の信頼性係数の判断基準

に従うと「非常に良好 (.80-.90)」ないしは「良好 (.70-.80)」程度の内部一貫性を示していると考えられた。

さらに、AFQS-J がどの程度データを説明しているかを検討するため、抽出された 3 因子を潜在変数、各因子に含まれた 14 項目を観測変数とする検証的因子分析を実施した。その結果、 $\chi^2(74)=212.140(p<.01)$ 、 $GFI=.953$ 、 $AGFI=.933$ 、 $RMSEA=.056$ を示した。 $RMSEA$ の値は基準となる .05 を僅かに上回ったものの、その他の値は基準を満たし、本尺度のおよその適合は確認できたと考えられた。

妥当性の検討 作成された尺度の基準関連妥当性を調べるため、AFQS-J と友人関係の活動的側面を測定する尺度の「相互理解活動」および中学生用疎外感尺度の「孤独感」との相関係数を算出した。その結果を表 3 に示した。AFQS-J の各因子と「相互理解活動」との間にはすべて有意な正の相関が示された。つぎに、AFQS-J の各因子と「孤独感」との間には、「自尊感情の向上支援」と「親密性」にて有意な負の相関が示された。また、「対立」には有意な正の相関が示された。これらはほぼ予測どおりであったため、高い基準関連妥当性が確認されたと考えられた。

さらに、AFQS-J の構成概念妥当性を検討するにあたり、最も仲の良い運動部活動での友人にて AFQS-J 各因子の顕著な得点が示されることを仮定し、Weiss and Smith(1999) と同様に、比較対象のため運動部活動において 3 番目に仲の良い運動部活動での友人を想像して回答させた。AFQS-J の回答時と同様に、想像した友人を途中で代えないよう教示を与えた。その結果、表 4 に示したように「対立」には有意差が認められなかったが、「自尊感情の向上支援」および「親密性」には有意差が認められ、予測どおり、3 番目の友人に比べ、最も仲の良い友人の得点が高かった。これらから構成概念妥当性が確認されたと考えられた。

性差および学年差の検討 中学生の運動部活動場面における友人関係の質の特徴を明らかに

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感

表1 中学生の運動部活動における友人関係の質尺度の因子パターン行列

項目内容	F1	F2	F3	h^2	M	SD
自尊感情の向上支援 ($\alpha=.83$)						
うまくプレーするために、友だちとお互いをほめ合う	.78	-.09	.04	.51	3.56	1.13
ミスをした時に友だちははげましてくれる	.74	.02	-.03	.57	3.79	1.09
友だちは、私のことを色々気にかけてくれる	.68	.01	-.03	.47	3.71	0.97
プレーをしている間、友だちは私を信頼している	.67	-.06	.06	.39	3.59	1.00
友だちとはお互いに支え合っている	.64	.17	-.01	.58	3.61	1.02
身につけた技術をうまくはっきしようとする時、友だちは多少の失敗は許してくれる	.50	.04	.00	.28	3.81	1.01
親密性 ($\alpha=.75$)						
友だちといっしょに遊ぶのが好きである	.01	.73	-.07	.56	4.21	1.02
友だちとはいつもいっしょにいる	.00	.69	-.05	.49	3.56	1.19
友だちとはいっしょにふざけあう	-.07	.57	.08	.28	3.97	1.10
友だちとはお互いに何でも話すことができる	.16	.56	-.10	.47	3.97	1.10
友だちとはお互いに“ないしょ話”をする	.02	.45	.20	.25	3.14	1.28
対立 ($\alpha=.74$)						
友だちとは口ゲンカする	-.05	.16	.81	.69	2.58	1.30
友だちと激しくケンカする	.07	-.08	.69	.46	1.87	1.16
お互いにむかつくことがある	.01	-.02	.64	.40	3.03	1.27

表2 中学生の運動部活動における友人関係の質尺度の基本統計量と因子間相関

下位尺度	M	SD	Min	Max	F2	F3
F1 自尊感情の向上支援	22.10	4.59	7.00	30.00	.54**	-.13**
F2 親密性	18.84	4.01	6.00	25.00		.03
F3 対立	7.48	3.03	3.00	15.00		

** $p<.01$

するため、AFQS-J 各因子を従属変数とし、性および学年を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果を表5に示した。まず、「自尊感情の向上支援」、「親密性」では、性の主効果が有意であり（自尊感情の向上支援： $F(1,$

596)=35.50, $p<.01$ ；親密性： $F(1, 596)=23.26, p<.01$), いずれも男子に比べ女子の得点が高かった。以上から、「対立」には性、学年にて差異がないことが明らかにされた。一方、「自尊感情の向上支援」、「親密性」には、学年に関

表3 中学生の運動部活動における友人関係の質尺度と各尺度間の相関係数

下位尺度	相互理解活動	孤独感
F1 自尊感情の向上支援	.53**	-.51**
F2 親密性	.47**	-.41**
F3 対立	.11**	.16**

** $p < .01$

表4 最も仲の良い友だちと3番目に仲の良い友だちの運動部活動における友人関係の質尺度の平均値と標準偏差およびt検定結果 (n=95)

下位尺度	最も 仲の良い友だち	3番目に 仲の良い友だち	t 値
	M (SD)	M (SD)	
F1 自尊感情の向上支援	23.21 (3.69)	21.47 (4.19)	3.93**
F2 親密性	18.86 (3.72)	16.81 (3.73)	5.52**
F3 対立	10.46 (3.05)	11.00 (2.92)	-1.53**

** $p < .01$

表5 運動部活動における友人関係の質尺度の2要因分散分析結果

下位尺度	男子			女子			主効果		交互作用
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	性別	学年別	
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F 値	F 値	
F1 自尊感情の向上支援	21.07(4.61)	21.18(4.67)	21.16(4.93)	23.47(3.91)	23.40(3.39)	23.16(4.95)	35.50**	0.05	0.11
F2 親密性	18.44(3.89)	17.73(3.94)	18.22(3.85)	20.02(4.21)	19.84(3.44)	19.24(4.33)	23.26**	0.99	0.88
F3 対立	7.01(3.06)	7.63(2.92)	7.61(3.04)	7.42(3.21)	7.38(2.88)	7.99(3.04)	0.47	1.95	0.70

** $p < .01$

わらず男子に比べ女子が高いという特徴が明らかにされた。日常生活全般において、思春期の男子と比べ女子は他者との関係性を重視するといった特徴が指摘されており(伊藤, 1993; 細田・田畠, 2009), 運動部活動場面においても類似の結果が得られた可能性が考えられる。

研究2：中学生の運動部活動における友人関係の質と運動部活動への適応感との関連

目的

研究1において、中学生の運動部活動場面における友人関係の質を測定する尺度を作成した。運動部活動場面における友人関係の質として、「自尊感情の向上支援」、「親密性」、「対立」の3因子が見出された。研究2では、これらの中学生の運動部活動における友人関係の質と、部活動への適応感との関連について検討することを目的とした。

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感

運動部活動と適応との関係について、竹村ほか(2007)は高校生活一般の適応として無気力感(自己不明瞭感, 他者不信感, 疲労感)を取り上げ, 運動部活動者と非部活動者との比較を行っている。ここでは, 自己不明瞭感において非部活動者に比べ運動部活動者が有意に低いことが明らかにされている。これらは, 適応感への運動部活動の影響を示唆した知見であり, 運動部活動への参加の肯定的効果を部分的に示したものと考えられる。よって, 次の段階にて運動部活動を通した適応を検討する場合, 運動部活動参加の有無に加え, 運動部活動にて友人と如何なる関係性を構築することが適応感へ影響するのかが検討することも重要であると考えられる。本研究における適応感は, 吉村(2005)を参考に「運動部活動における積極的行動および運動部の雰囲気への満足」と定義した。

方法

対象者 研究1の対象者とは異なるA県の公立中学校3校の運動部に所属する1年生から3年生までの652名(男子373名, 女子279名: $M=13.7, SD=0.89$)を対象とした。対象者はテニス($n=102$), 卓球($n=99$), バスケットボール($n=75$), バレーボール($n=68$), 野球($n=58$), 陸上($n=57$), サッカー($n=52$), 剣道($n=39$), 体操($n=39$), 柔道($n=25$), 水泳($n=16$), ハンドボール($n=13$), ソフトテニス($n=9$)の各運動部の所属であった。

調査内容

中学生の運動部活動における友人関係の質 研究1にて作成され, 信頼性・妥当性が確認されたAFQS-Jを用いた。

部活動への適応感 吉村(2005)が作成した, 部活動への適応感尺度の因子「部活動への積極的行動」, 「部の雰囲気への満足」を用いた。本尺度により, 部活動への積極的行動や部員相互の人間関係の満足についてどの程度該当するかについて, 6件法(1:全然あてはまらない—6:たいへんよくあてはまる)で評定を求めた。

得点が高くなるほど, 適応感が高くなることを意味するよう得点化した。

手続き 研究1と同様の手順により調査を実施した。とりわけ, AFQS-Jには最も仲の良い友人を1人想像し回答するよう求めた。調査時期は2009年12月上旬から中旬までであった。

結果と考察

本研究では, IBM SPSS Statistics 25を用いて統計解析を実施した。統計解析の有意水準は5%とした。まず, AFQS-Jと部活動への適応感との相関係数を算出した。その結果を表6に示したように, 「対立」と「部活動への積極的行動」以外のすべてに有意な相関が示された。

つぎに, 運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感との関連を検討するため, AFQS-Jの「自尊感情の向上支援」, 「親密性」, 「対立」を説明変数とし, 部活動への適応感尺度の「部活動への積極的行動」「部の雰囲気への満足」のそれぞれを目的変数とし, 重回帰分析(一括投入)を行った。分析に先立ち, VIFの値を算出し, 多重共線性が生じていないことを確認した。また, 研究1により運動部活動における友人関係の質に性差があることが確認されたため, 全体と性別にて分析を行った。

その結果, 図1に示したとおり, 全体では「自尊感情の向上支援」が共通して有意な正の影響を示し(「部活動への積極的行動」 $\beta=.49, p<.01$; 「部の雰囲気への満足」 $\beta=.32, p<.01$), 「対立」の有意な影響も加わり(「部活動への積極的行動」 $\beta=.10, p<.01$; 「部の雰囲気への満足」 $\beta=-.10, p<.01$), いずれの適応感においても決定係数(R^2)が有意となった(「部活動への積極的行動」 $R^2=.20, p<.01$; 「部の雰囲気への満足」 $R^2=.16, p<.01$)。このことから, 運動部活動における友人関係の質は部活動への適応感に影響する要因になり得る可能性が考えられた。

また, 性別による友人関係の質の部活動適応感への影響について表7に示した。分析の結果, 部活動への積極的行動においては, 男子は, 「自尊感情の向上支援」のみが正の影響($\beta=.53, p<.01$)

表6 中学生の運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感との相関係数 (n=652)

下位尺度	部活動への適応感尺度	
	部活動への積極的行動	部の雰囲気への満足
F1 自尊感情の向上支援	.43**	.39**
F2 親密性	.20**	.27**
F3 対立	.05	-.12**

** $p < .01$

を示した。女子では、「自尊感情の向上支援」が正の影響 ($\beta = .42, p < .01$), 「親密性」が負の影響 ($\beta = -.15, p < .05$), そして「対立」が正の影響 ($\beta = .15, p < .01$) を示した。また、部の雰囲気への満足については、男子は、「自尊感情の向上支援」($\beta = .31, p < .01$) と「親密性」($\beta = .17, p < .01$) が正の影響を示した。女子では、「自尊感情の向上支援」が正の影響 ($\beta = .39, p < .01$) を示し、そして「対立」が負の影響 ($\beta = -.12, p < .05$) を示した。以上から、性別により友人関係の質の適応感への影響が異なる可能性が考えられた。つまり、「自尊感情の向上支援」が男女に共通して顕著な関連を示したため、適応を考える上では非常に重要な側面であると推察される。また「対立」は、男子にお

<運動部活動における友人関係の質>

いては影響が見られなかったが、女子には比較的小さな影響のみが見られ興味深い結果であった。

総合考察

わが国では、ここまで未検討であった運動・スポーツ場面における友人関係の質に着目し、本研究を実施した。

「中学生の運動部活動における友人関係の質尺度 (AFQS-J)」の作成について

研究1では、Weiss and Smith(1999) のSFQSに準拠し、中学生の運動部活動場面における友人関係の質尺度を作成し、その信頼性と妥当性を

<部活動への適応感>

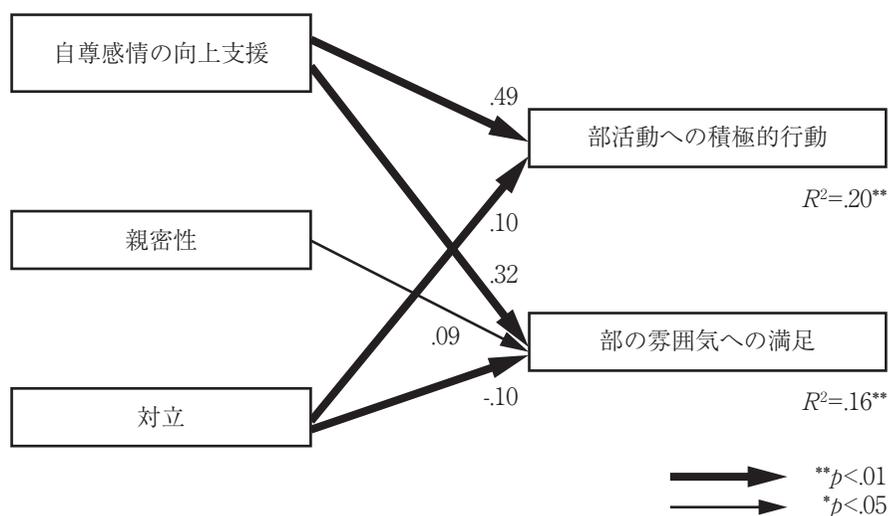


図1 部活動への適応感を目的変数とした重回帰分析結果 (全体: n=652)

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感

表7 部活動への適応感を目的変数とした重回帰分析結果 (男女別)

説明変数	男子 (n=373)		女子 (n=279)	
	部活動への積極的行動	部の雰囲気への満足	部活動への積極的行動	部の雰囲気への満足
	β			
F1 自尊感情の向上支援	.53**	.31**	.42**	.39**
F2 親密性	-.01	.17**	-.15*	.01
F3 対立	.07	-.07	.15**	-.12*
R^2	.28**	.19**	.13**	.17**

* $p < .05$, ** $p < .01$

検討した。そのところ、「自尊感情の向上支援」、「親密性」、「対立」の3因子14項目にてAFQS-Jが構成された。続いて、尺度の信頼性と妥当性を検討し、性や学年による特徴の検討も行った。

子どもたちの友人関係の測定は、従来からソシオメトリック法が頻繁に用いられ、運動部活動場面でもこの方法が採用されてきた(丹羽・東山, 1968)。しかし、ソシオメトリック法の場合、ノミネート法という方法論的問題に加え、子どもたちの友人関係の内容やその程度を十分に捉えることができないといった概念的問題も指摘されている(Parker and Asher, 1993)。この点、作成された尺度は子ども自身の友人関係に関する知覚を評価する自己報告式であるため、運動部活動場面における友人関係の質に関する新規の知見を提供できると考えられる。

尺度作成では、中学生の運動部活動における友人関係の質が3因子から評価されることが明らかとなった。本尺度はWeiss and Smith(1999)の因子とは異なる構造を示した。これには、対象者の年齢層の違いが考えられる。欧米では地域コミュニティでのスポーツクラブが整備され、長期休暇中は種々の組織がスポーツキャンプを催すこと等から、学校種の異なる子どもたちが一緒にスポーツ活動を行う機会が頻繁にある。そのような背景からWeiss and Smith(1999)は、8歳から16歳までを幅広く対象とし、応用可能性のある尺度を構成している。わが国でも地域スポーツクラブが

設立されているものの、学校種の異なる子どもたちがスポーツを共に行なう機会はまだ限定的である。従って本研究では中学生の運動部活動場面のみを捉え、この年代に適した測定尺度を作成することを試みた。実際、中学生は友人関係について、一緒にいる仲間として意味づけること(落合・佐藤, 1996)、また親密さがこの年代の特徴であること(榎本, 1999)などが示され、本研究でもこのような中学生世代の特徴に即した因子が抽出されたものと考えられる。本尺度は準拠した尺度と比較して因子および質問項目が少なくなったため、中学生の運動部活動の友人関係の質に焦点化し端的に捉えることが可能となり、また回答に掛かる負担が軽減され、他の心理的指標等とも合わせて測定できる尺度となったと考えられる。

また、本尺度は、友人関係の活動的側面を測定する尺度および中学生用疎外感尺度との関連について検討した。そのところ、「自尊感情の向上支援」、「親密性」は「相互理解活動」とは中程度の正の相関が、「孤独感」とは中程度の負の相関が得られ、関連の方向性が反対であった。さらに、最も仲の良い友人と第3番目に仲の良い友人との尺度得点の比較により信頼性および妥当性の検証を行った。結果、より仲の良い友人では友人関係の質の程度が高い傾向が示された。本尺度は複数の方法から信頼性ならびに妥当性が示され、有効性の高い尺度であると言える。

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感との関連

研究2では作成されたAFQS-Jを用いて、中学生の部活動への適応感との関連について検討した。その結果、運動部活動における友人関係の質は部活動への適応感に影響を及ぼす可能性が示唆された。これまで運動部活動での人間関係が適応に影響することが事例研究のみにて明らかにされてきたが(e.g., 高田ほか, 1987), 本研究の実証的データからもその可能性が考えられた。また, 性により友人関係の質の影響性が異なるという特徴も示された。男女共通的に, 「自尊感情の向上支援」は部活動適応感に結びつく要因であり, 比較的強く部活動適応感に影響したことから, 適応感を考慮する場合, 極めて重要な側面となる可能性が考えられる。すなわち, 中学時期の運動部活動では, 友人からの励ましや信頼, またお互いの賞賛や失敗時の許容が部活動での積極的行動や雰囲気といった適応感を強めることを示唆している。また, 男子の場合は, 「親密性」を高めることは弱いながらも部の雰囲気への満足を高める可能性があり, 一方, 女子の場合は弱いながらも部活動への積極的行動を低める可能性が考えられた。さらに, 女子にのみ「対立」は弱いながらも部活動への適応感への影響が示され, これを高めることは部活動への積極的行動を高め, 部の雰囲気への満足感を低める可能性が考えられた。中学生時期では, 男子に比べ女子にて「浅く広くかかわるつきあい方」をする傾向が強いことが示されている(落合・佐藤, 1996)。すなわち女子は, 誰とでも仲良くしようとするが本音を出さず友だちとつきあう傾向を有しているとされている。本尺度の「親密性」も女子のつきあい方の特徴の一部分を捉え, 浅く広くかかわるつきあい方によって個々の努力や一生懸命な練習への意識が比較的希薄になり, 運動部活動場面での積極的行動を低めることに結びついたのかもしれない。また, 男子に比べ女子において「浅く狭くかかわるつきあい方」は少ないことも示されている(落合・佐藤, 1996)。つまり, 女子は本音を出さず限られたつきあい方を行なう傾向があるため, 運動部活動場

面にて対立が生じた場合, 友人との仲の良さや信頼感等が損なわれ全体的な部の雰囲気への満足感が低下するものの, 一方で個々の努力や一生懸命な練習に重きが置かれ積極的行動は高まるといった反対の結びつきがあるものと考えられる。

本研究の制限と今後の課題

以下に本研究の制限と今後の課題を述べる。第一に従来, 米国にて小学生から高校生までの幅広い年代の測定に用いられてきたSFQSを援用することとした。SFQSは, Weiss et al.(1996)の質的分析を基にこれまで複数の手法から信頼性・妥当性が確認されてきた。本研究では, 対象者をわが国の中学生に限り, また運動部活動場面に限定して尺度作成を試みた。この相違を考慮すると検証的因子分析より探索的因子分析にて特有の因子構造を把握することは意味があると考え分析を実行した。結果的に抽出された尺度は, SFQSの因子構造とは同一ではなかった。これは年代と場面を反映した項目のみが抽出されたためと考えられる。一方, 友人とのつきあい方は多様なため文化的な差異による結果かもしれないが, 本研究のみではこの点を明らかにすることができなかった。今後は文化的な視点を含め友人関係の質の検討が必要であろう。第二に, 本研究では部活動への適応感のみの影響に留まった。これまでの学校場面での知見によると, 運動部活動における友人関係の質は適応感以外にも動機づけや態度, そして自己価値等といった変数に影響を及ぼす可能性が考えられる。そのため, 運動部活動における友人関係の質が社会的, 情緒的, そして認知的側面に影響を及ぼすかどうか, 今後詳細に検討する必要がある。その際には, Smith et al.(2006)が試みている友人関係の質のプロフィール化も有効であろう。すなわち, 友人関係の質のそれぞれの側面の単一的な影響のみでなく, 異なるいくつかの側面の組み合わせによる複合的な影響について検討することが有効と考えられる。第三に, 運動部活動でのストレス体験時において, 如何なる友人関係の質を保持していることが適応に結びつくのかといった, 種々の状況においての適切な友人関

運動部活動における友人関係の質と部活動への適応感

系の質の探索も必要と考えられる。

これまで述べた本研究の制限に加え、運動部活動における友人関係の質を解明する上では、以下を留意する必要がある。本研究は米国の青少年スポーツ実施者を対象に開発された SFQS を援用し、多数の対象者の調査を経て、結果的に日本の運動部活動を反映した心理尺度に改訂されたが、これらは量的検討から見出された友人関係の質の一端に過ぎない。とくに、尺度作成は質問項目ありきとなったため、わが国の運動部活動に見られる友人関係の質を的確に捉えるには、質的アプローチからオリジナルな友人関係の質を探索する必要がある。また、本手続きから尺度の精緻化を行った後に、量的および質的データをともに扱う混合研究法を採用し、運動部活動適応感との関連を探ることも有用と考えられる。

今後これらの研究が進展し、運動部活動における友人関係に焦点をあてた教育やその指導方法の有効性が幅広く確認されることが期待される。

まとめ

本研究では中学校期の運動部活動が生涯にわたって果たす役割を踏まえ、運動部活動における友人関係の質を測定し、またそれが部活動への心理的適応感に如何に影響を及ぼすかを検討した。研究1では、項目の検討を重ね予備尺度を作成し、公立中学校に通う604名の生徒を対象に調査した。項目分析や探索的因子分析の結果、「自尊感情の向上支援」、「親密性」、「対立」の3因子(14項目)からなる「中学生の運動部活動における友人関係の質尺度 AFQS-J」を作成した。AFQS-Jに対して、複数の手法による分析を行い、信頼性および妥当性を備えていることを確認した。続く、研究2では中学生の運動部活動における友人関係の質と、部活動への適応感との関連について検討した。公立中学校に通う652名の生徒を対象に AFQS-J および部活動への適応感尺度への回答を求めた。重回帰分析の結果、運動部活動における友人関係の質の複数の側面にて適応感への影響を確認した。また、影響性の性差も確認した。

これらの結果から、AFQS-Jの特徴や運動部活動における友人関係の質の性質について総合的に考察した。最後に本研究の制限と課題を述べた。

謝辞

本研究の実施に際して堤俊彦先生に多大なるご協力を賜りました。また、調査へご協力をいただきました先生方および生徒の皆様にご心より御礼申し上げます。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP22650147 の助成を受けたものです。

文献

- Berndt, T. J. (2002) Friendship quality and social development. *Current Directions in Psychological Science*, 11, 7-10.
- Bryant, F. B., King, S. P., and Smart, C. M. (2007) Multivariate statistical strategies for construct validity in positive psychology. In: Ong, A. D., and van Dulmen, M. H. M. (eds.) *Oxford handbook of methods in positive psychology*. Oxford University Press, pp.61-82.
- 榎本淳子 (1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. *教育心理学研究*, 47, 180-190.
- Gould, D., and Petlichoff, L. (1988) Participation motivation and attrition in young athletes. In: Smoll, F. Magill, R. and Ash, M. (eds.) *Children in sport (3rd ed.)*. Human Kinetics, pp.161-178.
- Hartup, W. W. (1995) The three faces of friendship. *J Soc Pers Relat*, 12, 569-574.
- 細田絢・田嶋誠一 (2009) 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究. *教育心理学研究*, 57, 309-323.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規 (2019)

- 学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題. 体育学研究, 64, 1-20.
- 伊藤美奈子 (1993) 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究. 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 松井豊 (1990) 友人関係の機能. 斎藤耕二・菊地章夫 (編著) 社会化の心理学ハンドブック: 人間形成と社会と文化. 川島書店, pp.283-296.
- 宮下一博・小林利宣 (1981) 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係. 教育心理学研究, 29, 297-305.
- 文部科学省 (2018) 教育課程外の学校教育活動と教育課程との関連 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 保健体育編. 東山書房, pp.246-248.
- 日本中学校体育連盟 (2022) 令和 4 年度 部活動数調査集計表. <https://nippon-chutairen.or.jp/cms/wp-content/themes/nippon-chutairen/file/kameikou/%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%94%E5%B9%B4%E5%BA%A6.pdf>(参照日 2023 年 8 月 4 日)
- 丹羽劭昭・東山千鶴子 (1968) ソシオメトリーによる運動部の凝集性の検討. 体育学研究, 12, 226-236.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して—. 教育心理学研究, 57, 419-431.
- Parker, J. G., and Asher, S. R.(1993) Friendship and friendship quality in middle childhood: Link with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Dev Psychol*, 29, 611-621.
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈 (2011) 高校運動部活動で不適応を示した中途退部者のストレス体験. 桜門体育学研究, 45(2), 1-17.
- Smith, A. L.(2007) Youth peer relationships in sport. In: Jowett, S., and Lavallee, D.(eds.) *Social psychology in sport*. Human Kinetics, pp.41-54.
- Smith, A. L., Ullrich-French, S., Walker II, E., and Hurley K.S.(2006) Peer relationship profiles and motivation in youth sport. *J Sport Exercise Psy*, 28, 362-382.
- 高田知恵子・田村宏・石淵真理子・藤永隆・下山定利・柚木仁・黒梅恭芳・丹野義彦 (1987) 部活動体験による青年期不適応について—事例検討一. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 37-45.
- 竹村明子・前原武子・小林稔 (2007) 高校生におけるスポーツ系部活動参加の有無と学業の達成目標および適応との関係. 教育心理学研究, 55, 1-10.
- 手塚洋介・上地広昭・児玉昌久 (2001) 中学生の部活動に関するストレス尺度作成の試み. *ストレス科学研究*, 16, 54-60.
- 手塚洋介・上地広昭・児玉昌久 (2003) 中学生のストレス反応とストレスラーとしての部活動との関係. *健康心理学研究*, 16(2), 77-85.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43, 33-42.
- Weiss, M. R., Smith, A. L., and Theeboom, M.(1996) "That's what friends are for": Children's and teenagers' perception of peer relationships in the sport domain. *J Sport Exercise Psy*, 18, 347-379.
- Weiss, M. R., and Smith, A. L.(1999) Quality of youth sport friendships: Measurement development and validity. *J Sport Exercise Psy*, 21, 145-166.
- Weiss, M. R., and Smith, A. L.(2002) Friendship quality in youth sport: Relationship to age, gender, and motivation variables. *J Sport Exercise Psy*, 24, 420-337.
- 吉村斉 (2005) 部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係. 教育心理学研究, 53, 151-161.

(2023.9.30 受付)
(2024.1.30 受理)